

今年、卒業する皆さんは、入学式の時から、すでにマスク姿でした。しかも、今日のように、一堂に会することもなく、それぞれの部屋に分かれて、ちょうど校内放送を聴くような仕方でのスタートでした。ふりかえると、この二年間は、まさしく、コロナにおおわれた二年間であったと思いますし、その二年間と皆さんの学生生活は完全に重なり合うものでもありました。

*

この二年間の学びは本当に大変なものだったと思います。まずはコロナというものの正体がよくわからないなかで、ただただコロナが恐れの対象だけであったときもありました。今は感染者の数に大して驚かなくなりましたが、最初のころは、数が20人くらい増えるだけでも非常に驚いていました。不要不急の外出は禁じられ、集まることはいけないこととされ、会話を楽しむこともいけないこととされました。さまざまな行事が中止になりました、延期また延期そして中止という形で、しかも何回も。

そのようなことのくりかえしの中で、がまんする心も育ちました。しかしそれと同時に、あきらめるという心も生まれ始めました。

がまんする心は、先々の期待や希望へとつながることもありますが、ともすると、あきらめへとつながってしまうこともあります。きっと皆さんの中にも、そんなあきらめの気持ち芽生えてきたことも何度も何度もあったことでしょう。

わたしは、このあきらめの気持ちというのは、コロナ禍のなかで、わたしたちのなかにはびこってしまった精神的な習慣のようにさえ感じています。

ただ、このように卒業式を行い、皆さんがここに座っているということは、皆さんが何よりも保育者になることをあきらめずに今日まで励んできたことの証だと思っています。卒業式・修了式を迎えてここにいることは決して当たり前のことではありません。とりわけ、今年度の卒業生・修了生に対しては、そのことを強く感じながら、今日の日まで、本当によく頑張ってきたということを伝えたいと思います。

*

昨日、特別活動奨励奨学生の皆さんの表彰式がありましたが、コロナ禍の中にあって、いや、コロナ禍の中にあるからこそ、かえって、あきらめない心をもって、相手を楽しませようとしてきたことに大いに感謝していますし、そのような活動に多くの学生が参加してくれたことを本当に嬉しく思っています。

*

先日、学内で、SDGsに関する講演会がありました。そのなかで、講師の朴先生は、SDGsにはいろいろな目標がある。たとえば、「4. 質の高い教育をみんなに」「3. すべての人に健康と福祉を」「11. 住み続けられるまちづくりを」「10. 人や国の不平等をなくそう」「12. つくる責任、つかう責任」「16. 平和と公正をすべての人に」「15. 陸の豊かさを守ろう」などたくさん目標があるけれども、最終的には、この目標に収斂していく、まとめ上げられるのではないかという形で、17番目の目標を示してくれました。それは、「パートナーシップで目標を達成しよう」というものでした。

パートナーシップという言葉は、協力関係、連携を意味するので、協力・連携しながら、目標を達成しよう、という風に置き換えることができると思います。パートナーシップは、仲間とか配偶者を意味するパートナーから生まれた言葉ですが、もう少し掘りさげて言うならば、パートナーというのは、相手の一部になっていくという意味です。

自分がまずあってその目標の実現のために、いろいろな人と協力していく、というよりは、相手の大きな目標のために、自分自身もその中に入っていき、というイメージの方が強いかもしれません。あるいは、相手の目標に自分自身を限りなく重ね合わせていくことかもしれません。大切なことは、自分よりも相手の方に力点がある、ということです。

*

これは、保育者となる皆さんが子どもと関わる時にも求められることなのではないでしょうか。

最初はまだ一人では何もできない子どもの手となり足となり、さまざまな部分になっていく、段々と子どもができるようになれば、少しずつ相手のより小さな部分になっていく、けれどもいつでも相手の一部分として働くことには変わらない

保育者となる皆さんは、子どもたちのそのようなパートナーになっていただきたい。

いま、ロシアとウクライナの間で起こっていることは皆さんもご存知でしょう。相手を自分の一部分にしようとする動きが世界中から非難されていますが、本当の意味で、パートナーになるというのは、相手を自分の一部に取りこむこととは真逆のことです。

皆さんの保育という仕事は、相手の一部に自分になっていくことです。その仕事に大いに誇りを持ちながら、新たな歩みを始めていただきたいと願っています。

*

今日お招きすることができなかった保護者の方々へ感謝したいと思います。この2年間、コロナ禍のなかで、皆さんの学生生活を心から心配し、皆さんを支えてくださった保護者の方々、その支えがなかったら、もしかしたら今日の日は来なかったかもしれません。

皆さんの一部分になってくださった保護者の方々に、改めて深く感謝したいと思います。

*

そして最後に、皆さん一人一人を送り出す柳城短大が、これまで皆さんの一部になっていたのであれば、それほど嬉しいことはありませんし、これからもいつでも帰れる場所の一つになるのであれば、それほど喜ばしいことはありません。

柳城は、これからも皆さんのパートナーであり続けることを、すべての教職員とともに、心より願っています。

卒業おめでとうございます。

(名古屋柳城短期大学 学長 菊地伸二)